

漢語方言における語彙変化の特徴： 類推の役割*

A Specific Feature in Lexical Change in Chinese Dialects: The Role of Analogy

岩 田 礼

公立小松大学

Abstract: This paper studies the history of the words representing the notions “three days from now,” “three days ago” and “evening” or “night,” by combining dialectal evidence (Maps 1–5) and philological evidence available from written texts. It has been known that Chinese words originally representing location or direction, along with those of many genetically unrelated languages, changed to be used as components for representing the notion of time. For example, in the standard language (Putonghua; PTH,) the words for “morning” and “evening” are *zaoshang* and *wanshang*, respectively, in which the element *shang* originally represented the notion “above, upper.” Expressions representing the notions “three days from now” and “three days ago” do not seem to have been lexicalized in Early Middle Chinese (3c–6c) or at any time before that, just as is the case in present day English. The two lexicalized forms *waihourì* (lit., “outer back day”) and *xianqianri* (lit., “preceding front day,”) appeared in the written texts of the Tang Dynasty (7c–10c). The issue of our concern is why and how these forms changed to the present PTH form *dahoutian* and *daqiantian*. While the elements *hou* “back” and *qian* “front” were retained (unchanged) and *tian* “sky” is a simple replacement of the head *ri* “day,” there should not have been any motivation for the initial elements *wai* “outer” and *xian* “preceding” to change to a general adjective *da* meaning “big, large” or “elder.” The evidence that attracts us is the existence of the forms e.g., *laohourì*, *laoqianri*, which use another non-head element *lao* meaning “old,” and generally distributes in adjacent areas to those of *wai*. We assume that the change from *wai* to *lao*, as well as from *wai* to *da*, was motivated by analogical association with Chinese kinship terms, which use *wai*, *lao* and *da* as non-head determiners, e.g., *wai**gong* “maternal grandfather,” *lao**niang* “maternal grandmother,” *dage* “elder brother.” As for “evening” and “night,” PTH uses the two forms *yeli* and *wanshang*, which correspond to the semantic division of English *evening* and *night*. One of our assumptions is that such a division was brought about by the contact of two forms, *yeli* and *wanshang*, in the Jianghuai area. We also assume that *zaoshang* and *wanshang* derived from the forms of “*zao*+X” (e.g., *zaochen*) and “*wan*+X” (e.g., *wanxi*) constructions, which once existed in Jianghuai. Chronologically, the birth of *zaoshang* precedes *wanshang*. The change from *zao*+X to *zaoshang* may have been motivated by phonetic and semantic declination of the substantial

morpheme X. Presumably the choice of *shang* among others for the notion “morning” was due to the analogy with that used in such words as *shangyue* “last month; lit., upper month,” so that logically the form *wanxia* “lit., evening lower” is expected as the form for “evening.” However, such a form eventually disappeared and changed to *wanshang* because of analogy with *zaoshang*.

Key words: Chinese dialect, motivation, analogy, attraction, time words

0. はじめに

中国語（漢語）の方言差が大きいことは一般にもよく知られている。これはこの言語が広大な地域に拡散しながら、各地で経時的に変化が生じた結果である。言語変化には音韻変化のような体系的なものと語彙変化のような個別的なものがあり、また言語内部で生じた内的変化と外部方言の影響によって生じた外的変化がある。いずれにせよ、漢語方言では他言語を圧倒する量の言語変化（音声、語彙、文法のすべてを含む）が生まれてきた。ジリエロン（Jules Gilliéron）によって創始された言語地理学の方法は、語（word）がなぜ、どのように変化するかというメカニズムについて多くの知見をもたらしたが、言語変化の宝庫とも言える漢語方言では、変化の要因についてさらに多くの発見が得られるはずである。

言語地理学が明らかにした変化の要因には、民間語源、牽引、同音衝突、そして類推などがある。ここで重要なのは、これらの要因が発動されるには、動機と条件が必要だということである（岩田 2017：188-190）。変化を促す動機がまずあり、そこに音声的或いは意味的条件が加わってはじめてこれらの要因が発動されるのである。

本稿では、時間詞の例を二つ取り上げ、言語地理学的考え方の一端を紹介したい。この二例において発動されたのは、一般には「類推」（analogy）と呼ばれる要因である。ただし、第二章で取り上げる語彙変化には、通常の種類とは性格を異にし、「牽引」（attraction）と呼ぶのがふさわしいものがある。類推は一般に閉じた語彙体系の中で生起する。“閉じた語彙体系”というのは、典型的には人称代名詞や指示代名詞があり、例えば北方方言の三人称代名詞“他” ta の声調は1声だが、“我” wo、“你” ni が3声であるのに類推して3声で発音される方言が多数報告されている（李栄 1965：118-119、曹志耘主編 2008、語法卷、地図3）。この場合、類推の主体は“他” ta である。“牽引”で最もよく取り上げられるのは“類音牽引”であり、意味的には無関係だが、一定の音声的類似性を有する孤立した語の間で生起する。例えば、ヤモリを表す語形“壁虎” bīhǔ によって、アリを表す“蝼蛄” pífú やコウモリを表す“蝙蝠” biānfú が牽引された例がある（Grootaers 1994、岩田編 2012、地図 26）。この場合、牽引の主体は“壁虎” bīhǔ であり、“蝼蛄” pífú や“蝙蝠” biānfú がそれに類推したと述べるのは明らかに不適當である。

一方、類推と牽引の特徴を併せもった例もあり、岩田（2007）では“類推牽引”と呼んだ。そ

ここで論じたのは、金元時代の文献によく現れ、多数の現代北方方言にも継承されている“今日个”、“昨日个”のような時間詞がなぜ量詞の“个”を取るに至ったかという問題であった。この論考で筆者は、時間詞が宋代から現れる“这一个”、“那一个”のような指示代名詞（現代中国語の zhèige, nàige の前身）の牽引を受けたものと論じた。¹⁾ただし、この語末の“个”は、“今年个”のような用例もあり（下記例文（9）に現れる“大前日箇”もその例）、特定の時間詞だけが取り得たとは考えられない。因って、指示代名詞による牽引という面のほかに、時間詞全体が指示代名詞に類推した面がある。

以下、第一章では、普通話で〈あさって〉、〈さきおとつゐ〉を表す語形“大后天”、“大前天”について、語頭成分が“大”となった歴史的原因について述べる。第二章では、普通話で〈よる〉を表す語形“晚上”、“夜里”について、なぜ英語の evening/night に相当するような意味（概念）の分担が生まれたかを述べ、併せ語形の生成と変化の原因を考察する。いずれのテーマについても、方言地図と歴史文献資料の双方を参照する。これまでの筆者の研究には、語史は文献に拠らずとも方言地図のみによって再構できるという一種の信念があった。しかし、いうまでもなく中国は歴史文献の宝庫でもあり、汪維輝氏をはじめとする近年の文献語彙研究（特に汪 2018）によって、語形ないしは語彙変化の精密な絶対年代の同定が可能であること、それが方言地図に基づく相対年代の同定にも影響を与えうることを教えられた。

現代中国語の語形を漢字表記する場合は、簡体字を用い、“ ”によって明示する。語義は〈 〉によって日本語で表記する。文献の用例は繁体字を用いる。提示する地図は、いずれも岩田礼編《汉语方言解释地图》（白帝社 2009, 好文出版 2012）からの引用である（以下《解釈地図》と略称する）。

1. “大后天”と“大前天”：なぜ“大～”か？

1-1 〈あさって〉、〈おとつゐ〉、〈しあさって〉、〈さきおとつゐ〉の概念表出

中国語の時間詞は方位成分を好む。方位成分は中心語（head）の前にも付くし、後ろにも付く。前者の例として“上（个）月”、“下（个）月”があり、後者の例として“晚上”、“夜里”がある（“上（个）月”のような語形表示は、括弧内の要素があってもなくてもよいことを示す。以下同じ）。

〈あさって〉、〈おとつゐ〉を“后天”、“前天”と呼ぶのも、方位成分を取るという意味で規則的である。方言でも“后日”、“前日”のように、限定成分（non-head）は“前-”、“后-”であることが多い（“前-”のような“-”を付した語形表示は、head が後続することを示す。以下同じ）。そのような規則性からはずれる語形として、〈おとつゐ〉の“隔日”、“先日”、“昨日”、〈あさって〉の“过（了）明”などがある。うち“过（了）明”は徐州以北の大運河沿いに連続的に分布する語形で、ちょうど日本語の“あさって”（明日が去った次の日）の形成と発想が類似する有縁性（語の形式と意味の間の関連性）の高い語形と言える。ところが多数を占める語形は、“前日”

にせよ“后日”にせよ、the preceding day、the following dayと意味の混乱を招きそうな曖昧な語形である。にもかかわらず、それらが長期にわたって使用されてきたのは、使用頻度が低く、同音衝突にも無頓着であったことを示すのであろう。つまり、人々は日常生活の中で、〈おとつゝい〉、〈あさって〉を表す語形という概念の表出に無関心であった。これは言語の違いを超えて普遍的な現象であり、日本語の“あさって”、“おとつゝい”（遠い日）は早くから語彙化したのが、英語のthe day after tomorrow や the day before yesterday は今なおフレーズである。

〈さきおとつゝい〉、〈しあさって〉となると、さらに表出の必要性がなかったことは容易に想像できる。敢えて表出しようとするれば、英語の three days ago, three days from now のように、数字で表現するのが簡単そうに見えるが、今度は指を折って数えねばならない。そのため、日本語の“しあさって”のように、“し”（四）が今日を起点とするのか明日を起点とするかでどの日を指すのか方言によって違いが生まれるという事態も生じる（国立国語研究所《日本言語地図》第6集、地図285、286）。

普通話の“大前天”、“大后天”はなぜ“大”なのか？ 方位成分で通そうとすれば、“前前-”、“后后-”や“上前-”、“下后-”となるはずで、実際にそれらを使う方言もあるのだが（管見では“下后-”はみつかっていない）、多数を占めるには至らなかった。

1-2 核心範疇と外縁範疇

日にちを表す時間詞について、古来、人々の生活にとって肝要だったのは、〈きょう〉、〈あす〉、〈きのう〉という3つの概念だけである。岩田（2007：4）ではこれを「核心範疇」と呼び、他の概念は「外縁範疇」と呼んだ。この二分法は、使用頻度の多寡にとどまらず、普通話形式の受容においても違いが見られる点で有効である。すなわち、「核心範疇」は普通話を容易には受け付けられないのに対して、「外縁範疇」は普通話の侵入を許容しやすい（岩田2007：20-22）。そのため伝播速度も速く、“大后-”、“大前-”という新形式は相対的に短時間で全国に拡散したと考えられる。

閩語には〈おとつゝい〉や〈さきおとつゝい〉を表すのに〈きのう〉を表す語形を転用した方言がある。

	〈きのう〉	〈おとつゝい〉	〈さきおとつゝい〉
厦門	昨日 [tʂa lit]	昨日 [tʂoʔ lit]	落昨日 [lo tʂoʔ lit]
福州	昨暝 [soʔ maŋ]	昨日 [soʔ niʔ]	老昨日 [lo soʔ niʔ]
尤溪	昨冥 [so maŋ]	昨日 [so nie]	昨昨日 [so so nie]

厦門は“昨”の音声形式が〈きのう〉と〈おとつゝい〉、〈さきおとつゝい〉で異なるが、語源から見ると、すべての語形が“昨”を共有すると言える。これについては、元々存在した〈おとつゝい〉や〈さきおとつゝい〉を表した語形がのちに“昨日”に置き換えられたという解釈もありえようが、そのような変化は動機がない点で不自然である。むしろ閩語地域には〈おとつゝい〉、〈さきおとつゝい〉

い) の概念を表す専用の語形は元々存在せず、新しい概念の表出のために転用が起きたものと考ええる。なぜそのような操作が行われたかと言えば、おそらく外縁範疇に対応する語形を有した權威方言が外部から侵入し、接触によって概念の明確化とそれに伴う語形の創出に迫られたためである。つまり、外部刺激によって内的変化が引き起こされた。

一方、〈あさって〉、〈しあさって〉を表す語形は、厦門、福州、尤溪のいずれの方言でもそれぞれ“后日”、“-后日”（-の部分は“老”、“落”、“大”など）のように、headが“日”である点を除き普通話と相同である。つまり、權威方言がそのまま受容された。

1-3 文献に現れた〈しあさって〉、〈さきおとつい〉

先秦時代には、外縁範疇を言語形式として表出しようとする話者の動機がなかった、それ故、それらを表す専用の語形が存在しなかったと考えられる。²⁾

前述のように、“前日”、“后日”はそれぞれ the preceding day、the following day の意味にも使われるので、〈おとつい〉、〈あさって〉を表すと同定できる用例を見つけるのが難しい。下記の3例で語義が〈おとつい〉と同定できるのは、同一文中に〈きのう〉や〈きょう〉を表す語があるためである。(1)、(2)は唐代、(3)は元代の資料である。

- (1) 寺主僧令徴談云、「此星是劍光也。先日、昨日、今夜三箇夜現矣」。(圓仁《入唐求法巡禮行記》卷一)
- (2) 前日君家飲，昨日王家宴，今日過我廬，三日三會面。(白居易《贈夢得詩》)
- (3) 昨日方知前日錯，今朝便覺夜來非。(張可久《點絳脣 翻歸去來辭》)

(1) から〈おとつい〉を表す語形として“先日”もあったことがわかるが、(2) と (3) では“前日”が使われることから、唐宋から元にかけて優勢だったのは“前日”の方だったと推定される。(1) は日僧、円仁の記録であり、汪維輝 (2018) によれば、上陸地の揚州辺りの方言であった可能性がある。なお、(3) の後半部に現れる“今朝”と“夜來”はそれぞれ、〈きょう〉と〈きのう〉を表し、下文第二章で論ずるテーマと関連する。

〈あさって〉を表す古い用例には次の(4)、(5)がある。それぞれ唐代、宋代の資料である。

- (4) 一年一年老去，明日後日花開。(韋應物《雜曲歌辭 三臺》之二)
- (5) 把酒看花須強飲，明朝後日漸離披。(晏殊《酒泉子》)

(5) の後半部に現れる“明朝”は〈あした〉を表す。

〈さきおとつい〉、〈しあさって〉を表す古い用例には次の(6)、(7)がある。それぞれ宋代、唐代の資料である。

- (6) 我前日有一問在爾處。爾先前日答我了也。即今因甚麼瞌睡。(大正新脩大藏經所収《大慧普覺禪師語録》卷9「室中機縁」)
- (7) 王君懇邀从從容。久方許諾。曰。明日來得否。曰。不得。外後日來。(《逸史》裴老,《太平廣記》卷42所引)³⁾

(6)では〈さきおとつゝい〉を表すのに“先前日”が使われ、(7)では〈しあさって〉を表すのに“外後日”が使われている。調査なお不十分であるが、文献からはこの二語形が古形と判断される。語頭成分は“先”が時間を現すのに対して、“外”は方位成分なのでバランスを欠くが、“外後”は二つの方位成分の結合という点で安定性がある。

これに対して、語頭に“大”を冠する“大后日”、“大前日”が使われるようになるのは、明代以降である。

- (8) 明日是個國家忌日, 後日又是七月十五日中元之節, 皆不可行刑。大後日亦是國家景命。直至五日後, 方可施行。(《水滸傳》第40回)
- (9) 是大前日箇, 衙門令史們送的來了, 得也得了。(《朴通事諺解》中)

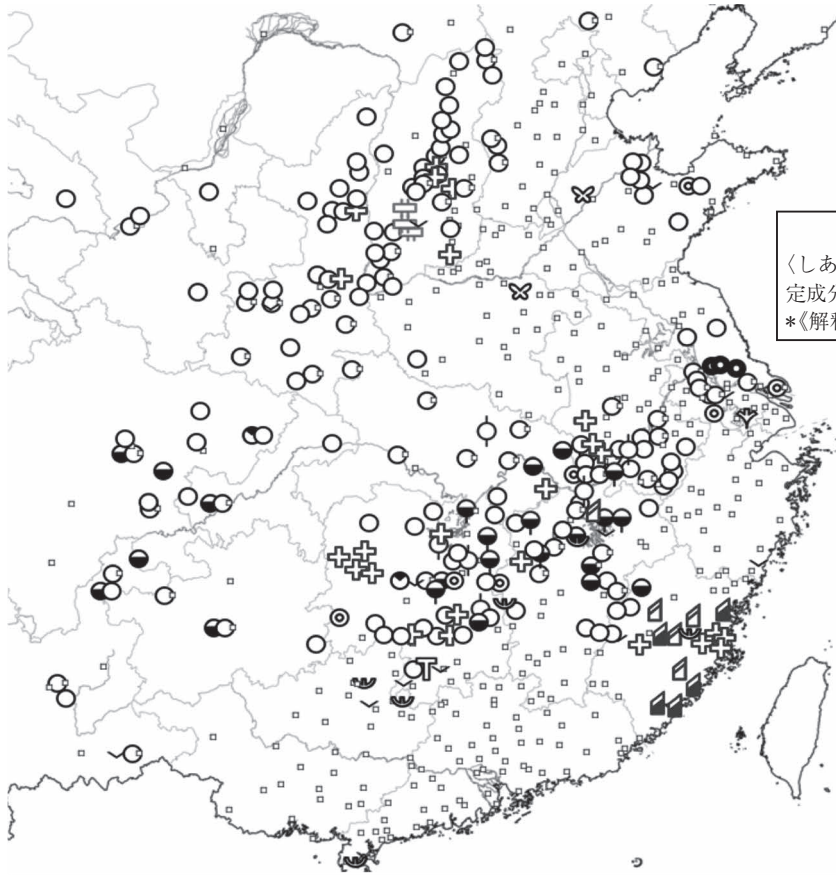
1-4 〈しあさって〉、〈さきおとつゝい〉の方言分布

地図1と地図2は、それぞれ〈しあさって〉、〈さきおとつゝい〉の限定成分の分布を示す。《解釈地図》地図12-1、14-1からの引用である。語形の第二成分は大多数が“后”又は“前”であるため、地図の凡例では〈さきおとつゝい〉の一部の語形を除き、語頭成分のみを表示している。以下の論述では限定成分(二音節)の全体を表記する。

全国的に見て、頭抜けて頻度が高いのは“大后-”、“大前-”であり、北方にも南方にも広く分布する。しかし前節で述べたように、より古いのは地図1〈しあさって〉の“外后-”(“外后日”、“外后儿”“外后个”“外后”など)、及び地図2〈さきおとつゝい〉の“先前-”(“先前日”、“先前个”など)である。いずれも長江沿い及び四川から、陝西、山西にかけて帯状に分布する。〈しあさって〉の“外后日”は山東省にも分布するので、他地域の“外后-”系語形とともに「周圏分布」とみなすことができる。“先前-”は山東省に分布しないが、その分布形状は“外后-”と似るので、こちらも以前は「周圏分布」だった可能性がある。これらのことから次の推定ができる。

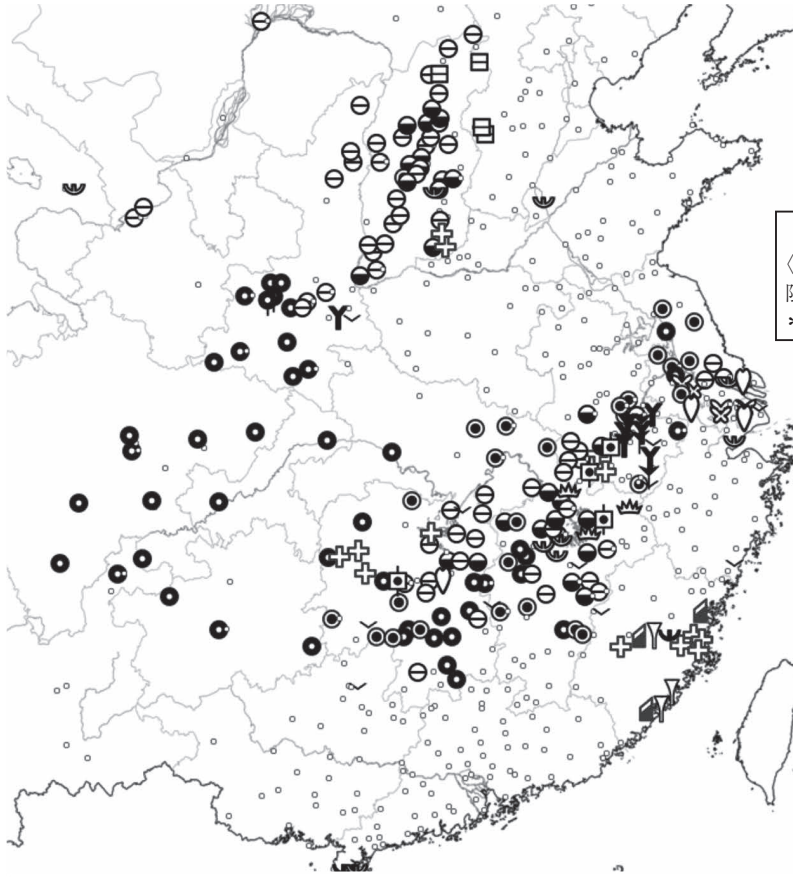
外后- > 大后- (しあさって) / 先前- > 大前- (さきおとつゝい)

“大后-”、“大前-”はどこで誕生したか? 「周圏分布」の考え方に従えば、北京も含む華北東部が有力である。ただし、“大后-”、“大前-”は長江流域にも多数分布している。地図1、地図2では小記号で表現したためみにくくなっているが、例えば、揚州は“外后-”、“向前-”であるのに対して、南京や蘇州は“大后-”、“大前-”である。従って、“大后-”、“大前-”は長江流域で生まれた可能性もある。



地図1
 〈しあさって〉を表す語形の限定成分（語頭成分）
 *《解釈地図》地図12-1より

A. 大 da-	D. 其他 / Others
□ 大 da-	⊞ 一 yi-
B. 外 wai- (uai-, uan-, uaŋ-, ŋai-, ŋan-)	⊞ 上 shang-
○ 外 wai-	⊞ 着 zhuo-
● 万 wan-	⊞ 后后 houhou-
● 弯 wan-	⊞ 过 guo-
◎ 晚 wan-, 满 man-	∨ 其他 / Others
● 望 wang-	
○ 艾 ai-, 挨 ai- (ŋ-声母 / ŋ- initial)	
● 暗 an-, 晏 an- (ŋ-声母 / ŋ- initial)	
C. 老 lao-, 落 luo-	
⊞ 老 lao-	
▧ 落 luo-	
▧ loŋ	



地図2
 〈さきおとつゐ〉を表す語形の
 限定成分（語頭成分）
 *《解釈地図》地図14-1より

A. 大 da-

- 大 da-

B. 先 xian-, 现 xian-, 向 xiang-, 上 shang-

- ⊖ 先 xian-
- 现(限、限)xian-, 选 xuan-
- ◎ 向前 xiangqian-
- 上前 shangqian-
- ⊕ 上先 shangxian-
- ⊞ 间jian-, 见jian-
- ⊠ 晏 an-, 望 wang-, 艾 ai-

C. 老 lao-, 落 luo- (l-)

- ⊕ 老 lao-
- ⊞ 落 luo-

D. 其他

- ✂ 着 zhuo-
- ∩ 前前 qianqian-
- ∪ 昨昨 zuozuo-
- ∩ 前隔 qiange-
- Y 赛 sai-, 再 zai-
- Y 外 wai-
- ∩ 逊 xun-, 瞬 shun-
- ⊞ 细 xi-, 歇 xie-
- ∨ 其他 / Others

1-5 変化の動機

では、なぜ“外后-” > “大后-”、“先前-” > “大前-”という変化が起きたのだろうか？まず、“外后-”系、“先前-”系はいくつかの変種を含むが、いずれも“外后-”、“先前-”と隣接して分布すること、及び音声及び意味がそれらと近いことから多数が派生形であると考えられる。

- 外后 > 万后、弯后、晚后、満后、望后、暗后
- 先前 > 現前、向前、上前、上先、晏前、细前

これらの語形の中に、“大后-”、“大前-”の祖形がないかどうか考えてみよう。

まず〈しあさって〉を表す“外后-”からの変化は、語義的にはすべて方位成分からの脱却であり、中でも時間成分に変化した語形が多い。“外后-”から“万后-”（はるか後），“晚后”（lateを表す成分の類義並列）への変化は音声的にも意味的にもわかりやすい。“先前” > “現前”は、後者が〈現在〉を表すことから、意味的派生というより類音牽引的である。

〈さきおとついで〉を表す“先前-”からの変化は、方位成分“上”を取る“上前-”の頻度が最も高い（“上先-”もあるが少数）。“上前-”は四川、陝西、湖南、江西など広い地域に分布している。⁴⁾ 方位成分のみによって構成されるため、受け入れられやすかったのだろう。この語形は湖南、江西などで“向前”と隣接分布し、音声的には“先前-” > “向前-” > “上前-”という変化を考えやすいが、分布領域の広さから見ると、むしろ“上前-”と“向前-”の先後は逆であった可能性が高い。“上前-”は“上月”〈先月〉や“上星期”〈先週〉に類推して“先前-”から直接変化したと推定する。

しかし、“外后-” > “大后-”、“先前-” > “大前-”の変化の中間段階に“万后-”や“上前-”があったとは想定し難い。そこから語頭成分が“大”に変化する動機がないからである。

ここで注目したいのは、C類とした“老-”である。“老-”は閩語地域だけでなく、長江中流域（湖南、湖北、安徽など）と北方の山西、陝西にも遠隔分布し、いずれも“外-”に隣接するので、派生関係があると考えられる。少し例を挙げる。

	〈しあさって〉	〈さきおとついで〉
湖南・沅陵	老后日	老前日
福建・永安	老后朝	老前暝工
福建・福清	老后日	老昨日
山西・晋城	老后儿	老前儿
山西・祁県	老外后天	現前日

注釈の必要な語形がある。永安の語形の“朝”と“工”はいずれも head で“日”と同義。この地点では、〈おとついで〉、〈きのう〉をそれぞれ“前暝工”、“昨暝”と呼び、“暝”も head とし

て使われる。“暝”の原義は〈暗い〉。福清の“昨日”は前述のように、〈きのう〉を表す語形が転用されたもの。祁県では〈しあさって〉と〈さきおとつゝい〉の形式が不均衡である。“現前日”は“先前日”から変化したものと考えられるが、“老外后天”は“外后日”が周辺の“老后－”（晋城の形式）と接触して“老外后日”となったのち、headが“天”に取りかえられたものだろう。なお、閩語地域には“老－”と隣接して“落－”（“落后日”、“落昨日”）が分布する。“老－”から派生したとみられるが、“落－”はおそらく“下”と同義である。ここには方位成分を志向する変化の動機を見て取ることができる。

さて、“外－”、“老－”、“大－”と並べて、三形式に共通する特徴は何かと言えば、いずれも親族名称に使われることである。〈外祖父〉、〈外祖母〉を表す“外公”、“外婆”、“老爷”、“老娘”や〈伯父〉、〈伯母〉を表す“大爷”、“大娘”などいずれも頻度が高いので、連想が働くことは容易である。《解釈地図》地図12-1の解説（岩田執筆）では次のように述べた。

假如说古代汉语不存在表大后天义的专名，“大－”、“外－”和“老－”都是后起的。其中先产生的必定是“外－”。应该说，先有“后日”，后来才产生了“外后日”。这种“外”的原义不详，但“外”与“后”的组合令人意识到子孙义的“后”，也令人联想到“外公”、“外甥”、“外孙”等表外亲的词形。“外后日”原先只分布于某一地区，后来遍及全国，而在其传播的过程中，也由其他亲属称谓的限定成份代替。

C系の“老－”多数都出现在与“外－”邻近的地点，我们认为是“外－”的代替形式。“老－”是“老爷”、“老娘”等的“老”。A系の“大－”就是“大爷”、“大娘”等的“大”。“外－”变成“老－”或“大－”，是出于类推性的联想。

このうち、「外」と「后」の組合せが子孫の意味の「后」を連想させ、という部分はなくともよかったかもしれないが、〈むすこ〉のことを「后生」、「后人」という地域（福建、甘肅など）があるので、まったくピント外れとも言えないだろう。いずれにせよ、「外后」から“外公”、“外甥”、“外孫”などが連想され、そこから“老－”や“大－”が連想されるのは、変化の動機としては十分だと考える。《解釈地図》の解説では「类推性的联想」（類推的連想）と呼んだ。ただし、このような連想は、“外－”を有する親族名称と“大－”又は“老－”を有する親族名称の双方を備える方言でなければ起こりえない。

親族名称ということで改めて語形を見てみると、〈しあさって〉の“满后”（江西・萍郷）や〈さきおとつゝい〉の“细前”（安徽・婺源）もその可能性がある。“满”と“细”はいずれも〈小さい〉の意味で、“大”とは反義語になるが、長江流域では排行最下位の親族に使われることがある。

残るは、〈さきおとつゝい〉を表した“先前－”がなぜ“大前－”や“老前－”に変化したかという問題である。“先前－”>“大前－”の変化は動機がない。実は、“老前－”の分布地点は“老后－”の半数程度であり、先に“老后－”が生まれて、後に“先前－”がそれに類推して“老前”

になったと考えるべきである。“先前－”が“大前－”になったのも同様に、“大后－”に類推した結果だったのだろう。

この種の類推はよく見られる。例えば、先に挙げた head として使われる“朝”の語源は、いうまでもなく〈あさ〉であり、それが〈あす〉を表す“明朝”に使われたが、類推によって〈きょう〉、〈あさって〉を表す語形にも使われるようになった。即ち“今朝”、“后朝”である（『解釈地図』地図6、11参照）。同様に、もと〈暗い〉を表した“暝”、“暗”、“晏”は、のちに head として〈きのう〉を表す語形に使われるようになったが（“昨暝”など）、さきに見たように〈おとつゝい〉や〈さきおとつゝい〉を表す語形の head ないしは限定成分ともなった（『解釈地図』地図13、14-2参照）。類推による転用が起きる場合、例えば“朝”は〈あさ〉という原義に対する話者の意識が希薄になる必要がある（semantic bleaching）。“先前－”>“大前－”の変化が、先に形成された“大后－”への類推であったとすれば、“大”はすでにその時点で親族名称の意識が薄れていたのであろう。ただし、“朝”が head として〈きのう〉や〈おとつゝい〉に転用された方言が少なく、逆に“暝”、“暗”、“晏”が〈あす〉や〈きょう〉に転用された方言が少ないことは、転用にある程度原義が関係することを物語っている。この点は、次章で議論する方位成分“－上”、“－下”にも関連する。

2. “夜里”と“晚上”：なぜ〈よる〉を表す語が二つあるか？

2-1 〈よる〉の概念区分

方位成分が語幹の後ろに付く代表例は、“夜里”、“晚上”である。普通話では、前者が「从天黑到天亮的一段时间」、後者が「太阳落了以后到深夜以前的时间，也泛指夜里」のように定義されている（《現代漢語詞典》1979年版）。これはちょうど英語の night（日没から日の出まで）と evening（日没から就寝まで）やフランス語の soir と nuit の概念区分に相当するので、教える方も学ぶ方も特に違和感はないのかもしれない。しかし、このような概念区分は、少なくとも、農村人口が全人口の大半を占めた時代の概念区分ではない。農民がふだん口にしたのは、〈日が西に傾いた〉、〈暮れなずんだ〉、〈日が暮れた〉、〈夜が更けた〉等の具体的で細分化された概念を表す表現であったろう。⁵⁾ 普通話の“夜里”と“晚上”のような概念区分は、〈あさって〉や〈おとつゝい〉の概念表出と同様、些か近代的な匂いがする。無論、これは〈よる〉を表す総称が存在しなかったことを意味しない。

〈よる〉を表す総称は、古来“夜”、“夕”、“宵”があったが、のちに“夜”が優位を占める一方、漢代以降、もと〈おそい〉を表した“晚”が名詞化した（汪維輝 2018：400）。その結果、“夜”系と“晚”系の語形が共存し、併用された地域とそうでない地域が生まれた。上述のような意味の分担は、併用地域で生まれたものと考えられる。〈あさ〉を表す総称も、“朝”系と“早”系が共存した点は、〈よる〉の“夜”系、“晚”系と平行的である。しかし、次節で述べるように異なる点があった。

2-2 〈よる〉、〈あさ〉の方言分布

地図3、地図4は、《解釈地図》5-1、4-1の引用である。それぞれ読み取りにくい部分があるので、原図の上に論旨に関わる注を書き込んだ。うち地図3〈よる〉は、利用した方言資料で〈晚上〉、〈夜里〉と注記されている語形をすべて読み込んで作成したものである。

地図3の“夜”系と、地図4の“朝”系は原図ではいずれも青色の記号で示している。地図3から、“夜”系語形の分布は北方に少ないことがわかる。これは下文(2-3-2節)で詳述するように、唐五代から北宋にかけての時期に、“夜来”、“夜里”などの指示対象が〈よる〉から〈きのう〉にシフトしたためである。

地図4から、“朝”系語形は全体として衰退したことがわかる。主な残存地域は、広東省を中心とした地域、長江下流域(北部呉語)及び山東半島先端部(3地点)であり、分布地域は分断されている。分断の一つの原因は、浙江省を中心に分布する“天光”、“天亮”、“五更”等、〈よあけ〉を表した語形が“朝”系に取って代わったことである(《解釈地図》4-1解説, p.76)。

上で「“夜”系と“晩”系の語形が共存し、併用された地域とそうでない地域」と述べたが、話を単純にして、“晚上”の分布地域をみると、江蘇省の江淮官話と北部呉語の間に比較的はっきりした等語線が観察できる。即ち、江淮官話では“晚上”の単用又は“晚上”と“夜”系(“夜里”、“夜头”)の併用が多いのに対して、北部呉語(及び南通地域)は“晚上”が皆無と言ってよい。同様に、安徽省の官話地域(長江以北)は“晚上”が多いのに対して、安徽省南部(徽語)、江西省、湖南省には少ない。

“晩”で始まる“晩-”系語形には、“晚上”(凡例のC-1、原図では赤色記号)のほか、下記のものがあり(凡例のC-2、C-3、C-4)、いずれも長江中上流域に分布する傾向がある。地図3では“晩-”系の分布範囲を楕円で示した。

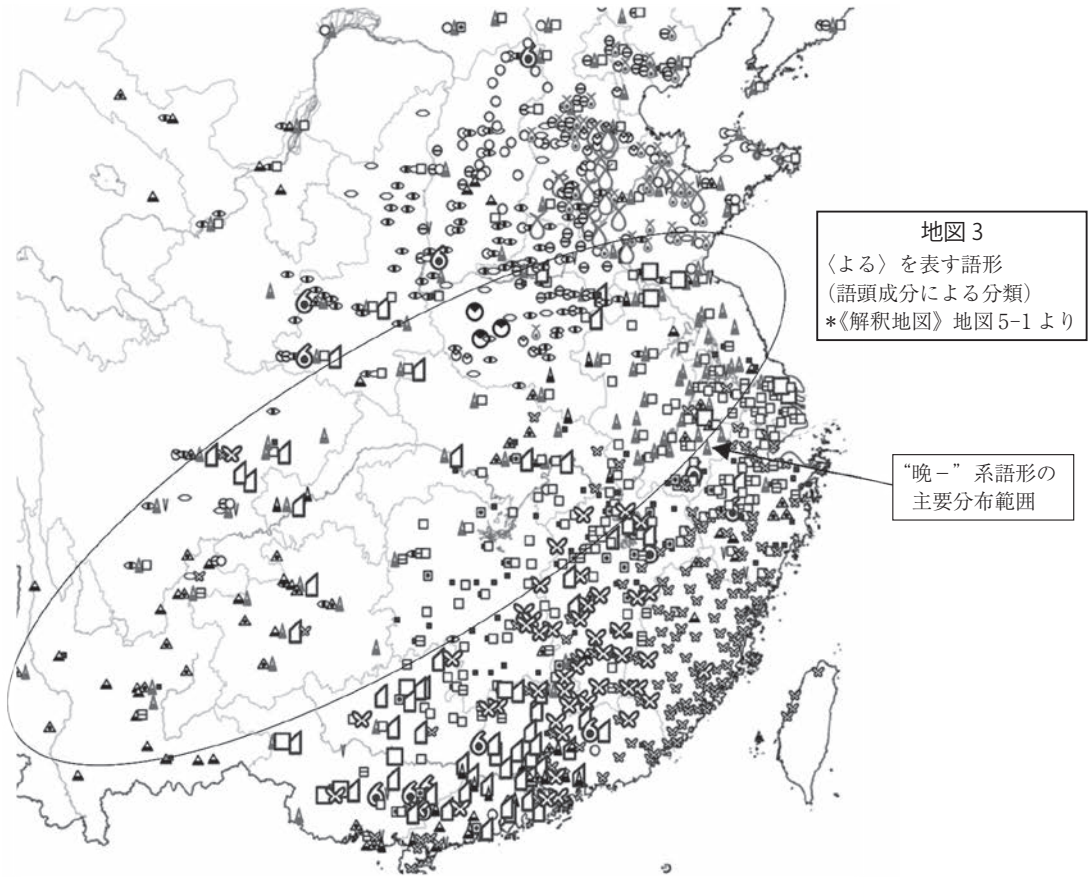
晩夕(貴州)、晩些(貴州、四川、安徽)、晩界(湖北)、晩黒(四川)、晩辰、晩起(雲南)

このうち“晩夕”は陝西、甘肅、寧夏など西北地域にも分布する。“晩些”は音声形式が[uan ci]となる地点もあるので(例えば四川省成都)、“晩夕”の派生形かもしれない。“晩黒”は広東省にも分布する。しかし、広東の“晩黒”は“夜晩”及び“夜晩黒”と隣接分布するので、次のような変化を経たものと考えられる。つまり、長江流域の“晩黒”とは由来が異なる。

夜晩 > 夜晩黒 > 晩黒

地図3は語頭成分に着目したものであるので隠れてしまったが、華南でも“晩”が語頭に来ない“夜晩”なら分布地点は多い。

“晩-”系が少ないのは南方非官話地域だけではない。淮河以北の北方地域では、甘肅や東北三省、内モンゴを除き、河北、山西、山東、河南いずれも“晩-”系は少なく、まとまった分布が見られない。標準語形が拡散する場合の典型的な分布パターンである。⁶⁾

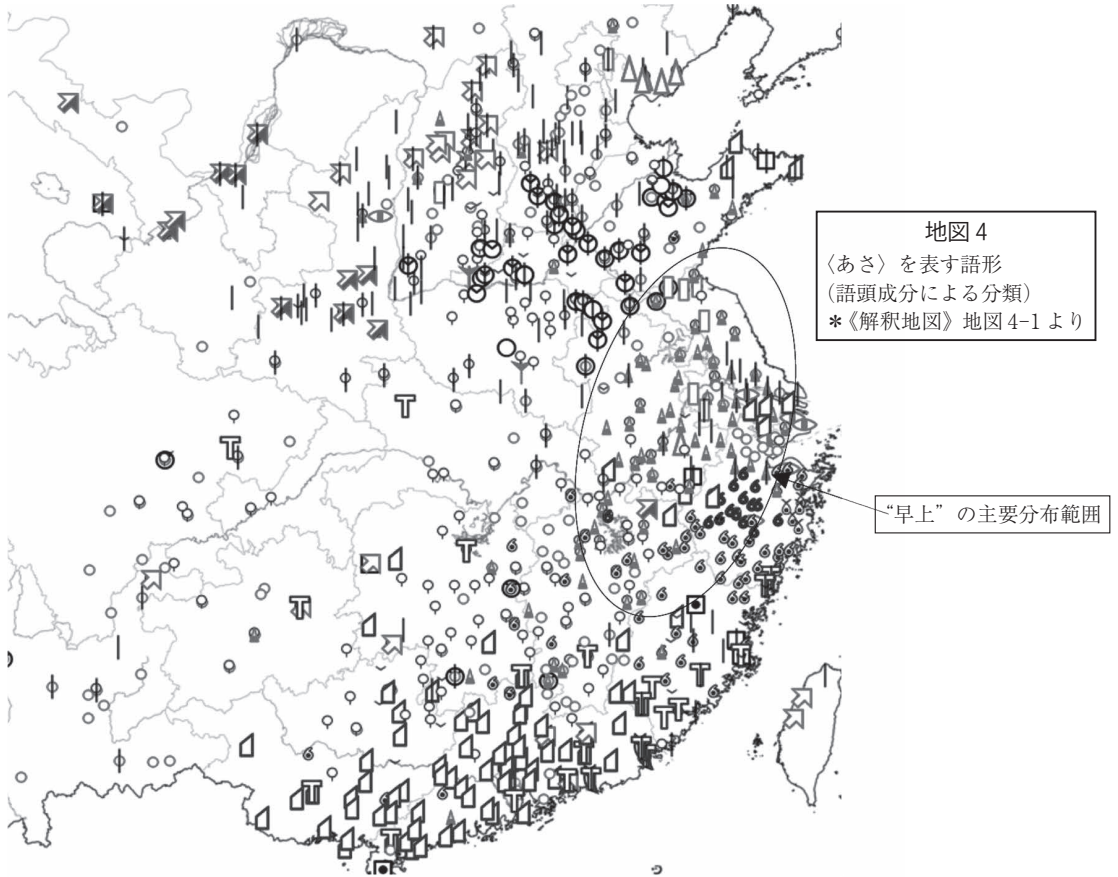


地図3

〈よる〉を表す語形
(語頭成分による分類)
*《解釈地図》地図5-1より

“晚-”系語形の
主要分布範囲

- | | |
|--|---|
| <p>A. 夜 ye-</p> <ul style="list-style-type: none"> ▧ A-1 夜晚 yewan □ A-2 夜来 yelai □ A-3 夜里 yeli ▣ A-4 夜间 yejian ▩ A-5 夜头 yetou ✂ A-6 夜哺 yebu ⑥ A-7 夜 ye (单音节/monosyllabic) ▪ A-8 夜 ye (双音节/bisyllabic) 其他/Others <p>B. 暗 an-, 暝 ming-, 黄 huang-, 乌 wu-</p> <ul style="list-style-type: none"> ✂ 暗暝 anming, 暝昏 minghun etc. <p>C. 晚 wan-</p> <ul style="list-style-type: none"> ▲ C-1 晚上 wanshang ▲ C-2 晚黑 wanhei, 晚头黑 wantouhei | <ul style="list-style-type: none"> ▲ C-3 晚夕 wanxi, 晚辰 wanchen, 晚晨 wanchen ▲ C-4 晚 wan- 其他/Others <p>D. 黑 hei-</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ D-1 黑夜 heiye ⊖ D-2 黑家 heijia, 黑价 heijia, 黑间 heijian ⊙ D-3 黑下 heixia, 黑些 heixie, 黑上 heishang ⊕ D-4 黑 hei+l: 黑来 heilai, 黑里 heili, 黑了 heile ◊ D-5 黑 hei- 其他/Others <p>E. 后 hou-, [xou]-, [xau]-</p> <ul style="list-style-type: none"> ⊘ E-1 [xou xau], [xou xau], [xau xou] ⊙ E-2 后晌 houshang, 后上 houshang etc. ⊘ E-3 过晌黑 guoshanghei <p>F 其他 / Others</p> <ul style="list-style-type: none"> ⊙ 行黑 hanghei ∨ 下晚 xiawan, 麻黑 mahei, 断暗 duan'an etc. |
|--|---|



地図4
 〈あさ〉を表す語形
 (語頭成分による分類)
 *《解釈地図》地図4-1より

“早上”の主要分布範囲

- | | |
|--|---|
| <p>A. 朝 zhao</p> <ul style="list-style-type: none"> ◻ 早朝 zaozhao, 朝早 zhaozao etc. <p>B. 早 zao</p> <p>B-1 早 zao(单音节), 早头 zaotou</p> <ul style="list-style-type: none"> ◻ 早 zao(单音节/monosyllabic) ◼ 早头 zaotou <p>B-2 早 zao+X</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 早晨 zaochen, 早清 zaoqing, 早心 zaoxin ▲ 早上 zaoshang, 早晌 zaoshang △ 早下 zaoxia, 早些 zaoxie ◁▷ 早行 zaohang, 早杭 zaohang <p>B-3 X+早 zao</p> <ul style="list-style-type: none"> ◊ (大)清早 (da)qingzao, 清早八晨 etc. ◻ 一早 yizao, 一大早 yidazao | <ul style="list-style-type: none"> ↘ 赶早 ganzao, 干早 ganzao ↗ 打早 dazao, 当早 dangzao ⊥ 起早 qizao, 晨早 chenzao, 透早 touzao <p>C. 清 qing, 晨 chen (不含“早”/lacking “zao”)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 清 qing(单音节), 清子 qignzi, 清清 qingqing ⊙ 清晨 qingchen, 清起(来)qingqi(lai) <p>D. -起 qi, -起来 qilai</p> <ul style="list-style-type: none"> 早起(来)zaoqi(lai), 早起头 zaoqitou etc. <p>E. 其他 / Others</p> <ul style="list-style-type: none"> ∩ 前晌 qianshang ∞ 枯心 kuxin, 颗星 kexing ⊗ 天光 tianguang, 天亮 tianliang ⊙ 五更 wugeng ⊙ 眠起 mianqi ∩ 其他 / Others |
|--|---|

こうしてみると、“晩一”系語形の分布は、所謂“長江型分布”だと言える（岩田 1995, 2000、また《解釈地図》「緒論」を参照）。〈あさ〉を表す“早上”系語形（“早下”、“早响”、“早些”を含む）もこれと似るが（《解釈地図》4-2を参照）、こちらは長江中上流域の分布を欠く点が異なる。筆者は“長江型分布”には二つのタイプがあると考えている。一つは、ある特定の語形が長江下流域から上流の雲南まで連続的に分布するタイプ。もう一つは、長江下流域から中流域まで分布が伸びた後、向きを南に変えて江西、湖南に伝播していくタイプ。後者は明朝による雲南征服以前、長江沿いの交易ルートが雲南まで至っていなかった時代の「古い伝播ルート」であり、前者は明代以降に形成された「新しい伝播ルート」である。〈あさ〉を表す“早上”系語形の分布は「古い伝播ルート」に近く、〈よる〉を表す“晩”系語形の分布は「新しい伝播ルート」を示唆する。

以上のことから、“晩上”は長江下流域の江淮地域（南京、揚州を中心とする）で生まれ、その後長江沿いに雲南まで伝播したと考える。発生地域と伝播先には、元々“夜”系語形が存在していた。“晩上”と“夜”系は当然衝突するが、このような場合三つの帰結がありうる。一つは、新語形が勝利し、旧語形（この場合は“夜”系）が消える場合。あとの二つは、両語形の力が拮抗した場合に起きる。まず、足して二で割った混淆形が生まれる場合。例えば、“晩上”が分布しない江西省で“夜上”がいくつも現れるのは（江蘇省や安徽省にも分布する），“晩上”がかつてここにも伝播した可能性を示唆する。語形衝突で起こりうる三つめの帰結は、複数の語形による概念領域の分担である。江淮地域における“夜里”と“晩上”はまさしくこのケースであり、それが普通話における用法ともなった。“夜里”と“晩上”はいずれも方位成分を取りながら、“一里”と“一上”でアンバランスである。なぜアンバランスなのかその由来を考える必要があるが（後述参照）、差異がはっきりした語形の方が隣接する意味領域の表出には好都合と言えるだろう。

以上がひとまずの結論であるが、話はここで終わらない。

2-3 “晩上”の発生・伝播時期

2-3-1 文献的知見と長江型分布に関する仮説

上述のように、長江沿いの「新しい伝播ルート」は明代以降に形成されたと推定されるが、では“晩上”は明代以降に生まれた語形かと言えば、そうではなさそうである。汪（2018：401）によれば、“晩上”が頻出するようになるのは明代からだが、初出例は下記元代の文献だという。

(10) 我在學中讀書，晩上睡不着，便思想人有生死，不能逃的。（史九散人《蝴蝶夢》第一折）

上記の仮説に従えば、この語形“晩上”は江淮地域で誕生した後、まず同地域内で拡散したのち、明代を俟って長江中上流域に伝播していったことになる。一つの問題は、この資料の著者、史九散人が江淮地域出身ではなく、河北省・真定の出身であることで、これは江淮地域から短期

間に北方へ飛び火伝播したと考えるしかない。

一方、“早上”は南宋《朱子語類》に何例も見られるほか、同時代の次の用例もある。つまり、“早上”と“晚上”は同時に生まれたのではなく、“早上”が先行した。

(11) 早上遷知省至官，恭問二聖起居。（周密《武林舊事》卷七）

原図では“早上”のほか、“早晨”、“早清”、“早心”、“早起”など（以下“早X”系と呼ぶ）を同じ赤色記号で示したが、地図4では“早上”に着目して主要分布地域を楕円で示した。その分布形状は「古い伝播ルート」に近いことがわかる。“早上”は「新しい伝播ルート」の形成以前に誕生していたため、「古い伝播ルート」に乗って、長江中流域から江西、湖南に拡散したのだろう。また、“早上”の周囲に他の“早X”系が分布することから、早X > 早上の変化が起きたと考えられる（後述参照）。

2-3-2 指示対象の変化と方言分布

北方方言で〈よる〉を表した“夜-”系語形に、ある時一大事が起きた。それは“夜来”、“夜里”などの指示対象が〈きのう〉に変化したことである。これを「転移」(referential shift)と呼ぶ。

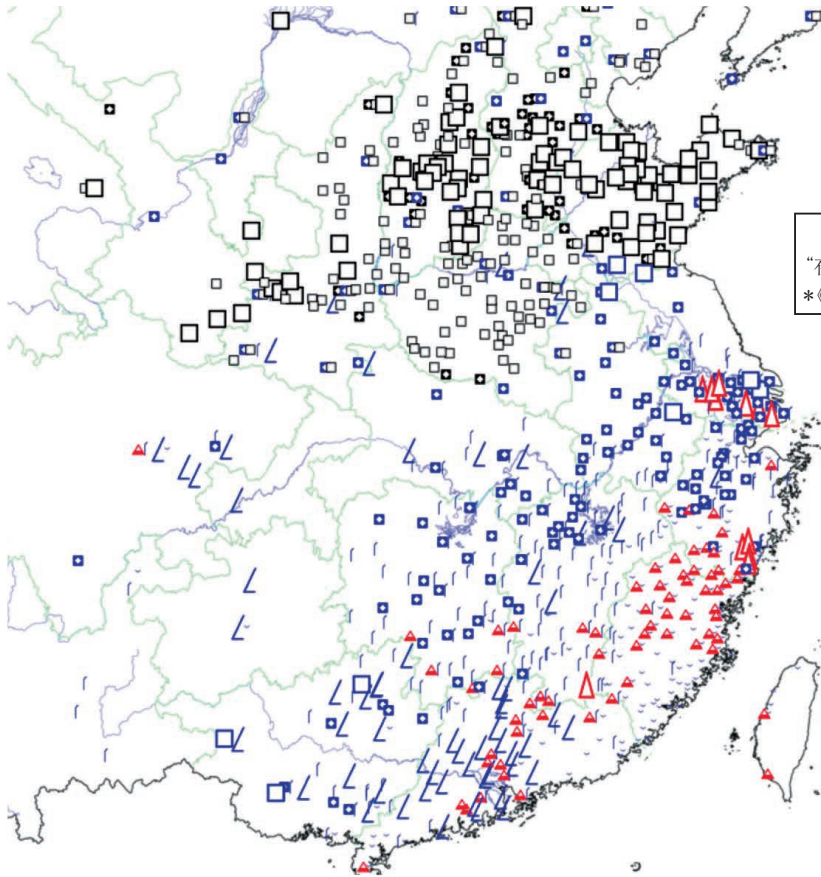
地図5は《解釈地図》10の引用で、“夜”系語形が〈よる〉、〈きのう〉のいずれを指すかを示したものである。まず、三角記号(赤色)で示した“昨夜”、“昨暝”、“昨晡”の類は、おそらく〈きのう〉を表す古形であり、〈あした〉を表す“明朝”とペアをなした。⁷⁾次に、“夜”系語形の〈よる〉→〈きのう〉という転移が起きた地点(黒色)と指示対象の変化が生起せず、“夜来”、“夜里”、“夜晚”などが〈よる〉を表す語形として維持された地点(青色)が明瞭な地域差をなす。指示対象の転移が生起した地域は、ちょうど「淮河-秦嶺線」以北である(《解釈地図》「緒論」: 13-14)。《漢語大詞典》に“夜来”が〈きのう〉を指す用例が二つ挙げられている。それぞれ北宋、元の作品である。

(12) 笑捻粉香歸洞戸，更垂廉幕護窗窓紗，東風寒似夜來些。（賀鑄《浣溪沙》詞）

(13) 你便是月明和尚。夜來八月十五，你不出來，今日八月十六日你可出來，正是越過十五還依舊。（無名氏《度柳翠》第二折）

(12)における“夜来”の語義が正しく〈きのう〉であるとすれば、北方方言における“夜”系語形の指示対象の変化は、すでに北宋時代に起きていたことになる。

ここで重要なのは、地図5において〈きのう〉を表す“晩-”系語形が皆無であることで、見事に一つもない。このことは、淮河-秦嶺線以北で指示対象の転移が起きた時、“晚上”がそこに



地図 5
 “夜”系語形の転移
 *《解釈地図》地図 10 より

A. 指晚上或夜里 / meaning "evening" or "night"

- ▣ 夜里 yeli
- 夜来 yelai
- / 夜晚 yewan
- ∟ 夜晡 yebu, 夜头 yetou, 夜间 yejian, 夜 ye etc.
- ∩ 暗冥 anming, 暗晡 anbu, 黄昏 huanghun etc.

B. 指昨天 / meaning "yesterday"

- ▣ 夜里(个)yeli(ge), 夜儿里 yerli, 夜了个 yelege
- 夜来 yelai
- 夜日 yeri, 夜儿 yer, 夜个 yege, 夜们 yemen etc
- △ 昨夜 zuoye
- ▲ 昨暝 zuoming、 昨晡 zuobu etc.

なかったことを意味している。これは“晚上”の文献初出が元代であるという事実と符合し、この語形が宋代以降に江淮地域で生まれたことを示唆している。

“夜-”系語形が〈きのう〉を表すようになると、〈よる〉に対応する語形が空位となる。それを埋めたのは、一つには“黑夜”、“黑家”等の“黒”系語形であった（地図3のD類）。“黒来”、“黒里”も頻度が高く、語幹だけが“夜”から“黒”に置き換えられたことを示している。もう一つ広い分布地域を有するのは“后响”であり、山東、河北南部を中心に分布する（地図3のE類）。この語形はもと〈午後〉を表したが、それが〈よる〉の空位を埋めた。結果として、〈午後〉→〈よる〉→〈きのう〉という玉突きが起きたことになる（正確には「引き連鎖（drag chain）」）。なお、北方に〈よる〉を指す“夜里”が散在するのは、指示対象の変化以降に江淮地域から持ち込まれたものである。

2-4 “晚上”の成因

最後に残されたのは、“晚上”という語形がなぜ、どのように生まれたかという問題である。この点について、岩田（2007：18）及び《解釈地図》（地図5-2解説）は、次のような仮説を述べた。

- 1) “晚上”、“夜里”はいずれも“夜晚”に由来する。
- 2) “夜晚”はまず“夜来”に変化し、のちに“夜里”となった。“-来” > “-里”の変化は“这里”、“那里”をはじめとする場所詞からの牽引に因る。
- 3) “夜里”が生まれた後も“夜晚”は多くの方言で保存された。
- 4) その後、山東省などに勢力をもった“后响”が江淮地域に侵入したが、当時、江淮地域にあった“夜晚”がそれと接触した結果、“后响”の“后”が“晚”に置き換えられた。これは類義置換。その結果“晚响”が生まれたが、のちに場所を表す接尾辞“上”への類推によって“-响” > “-上”の変化が起きた。

以上の仮説は方言分布にのみ基づくが、汪（1999）、何（2017）の文献研究によってほとんどが成立しないことを教えられた。

まず、仮説2）は無効である。汪（1999）によれば、方位を示す接尾辞の“里”はすでに前漢から用例があり、六朝期からは時間を表す“今夜里”のような用例も現れる。何（2017）は、岩田（2007）で述べた上記の私見を批判して、“夜来”と“夜里”には明確な後先の関係がないと言う。下記はそこで挙げられた“夜里”の用例。唐代の作品である。

(14) 白頭使我憂家事，還如夜裏燒殘燭。（王建《去歸》）

従って、仮説1）で“夜里”が“夜晚”に由来するというのも誤りである。なぜなら“夜晚”の用例は（14）と同じく唐代のものしか見当たらないからである。

(15) 言或早或夜在於君所者，謂諸妾夜晚始往及早來也，亦異於夫人也。（《詩經 國風 召南 鵲巢》、孔穎達疏）

仮説4)については、“后响”が現れるのは清初の《醒世姻縁傳》辺りからであって、元代の文献に現れ、明代に頻出する“晚上”とは先後関係が逆である。⁸⁾太田（1958：93）も“晚上”の“晚响”由来説を否定している。また、「場所を表す接尾辞“上”への類推によって“-响”>“-上”の変化が起きた」とするものも必ずしも正しくない。前述のように、“晚上”の文献初出は元代であり、南宋ではすでに普及していた“早上”より遅れて生まれたと考えられる。従って、類推の対象は、場所を表す接尾辞“上”一般ではなく、“早上”そのものであったと考えるべきである。⁹⁾

最後に残った“晚上”が“夜晚”に由来するという仮説1)、3)は、後部要素“晚”の前部への移動と“夜”の脱落を想定せねばならない点で難点がある。もし元代以前の江淮地域に“晚X”系の語形が存在したとすれば、“早X”系と平行的な解釈が可能であり、“夜晚”を“晚上”の祖形とみなす理由がなくなる。

そこでまず“早上”の形成について考えてみる。上文で、“早上”の周囲に他の“早X”系が分布することから、早X>早上の変化が起きたと推定した。本稿の推論において、このXが何であったかは最も肝要な点ではないが、敢えて候補を絞れば“晨”が最有力である。その根拠は“早上”の周辺に“早晨”が多数分布することである（地図4参照）。また、“早晨”は六朝期の用例があるので、“早上”が宋代に現れることをうまく説明できる。

(16) 感寒難之早晨，憐霜雁之違漠。（南朝宋、鮑照《舞鶴賦》）

次に、“晚X”系の語形でXが実辞であるものは、上で挙げた“晚夕”、“晚界”、“晚黒”、“晚辰”がある（地図3のC-2、C3、C4）。うち広東に分布する“晚黒”は、上述のように“夜晚黒”から変化したものなので“晚上”の形成とは無関係である。このほかの“晚X”系語形は全体として頻度が高くないが、長江流域にも一定程度分布するので“晚上”の祖形として想定することが許されるだろう。うち最も有力なのは“晚夕”である。この語形は元曲によくみられるが、《漢語大詞典》及び何（2017）、汪（2018）によれば、すでに唐代に用例がある。

(17) 那堪更到芙蓉拆，晚夕香聯桃李蹊。（劉威《題許子正處士新池》）

現代方言における“晚夕”の分布地域は、陝西、甘肅、寧夏などの西北地域と貴州などの西南地域であり、江淮地域には見当たらない。しかし、“晚上”が生まれた頃には江淮地域にも“晚夕”が分布していた可能性がある。

仮に“早晨”、“晩夕”を基に議論を進めると、この二語は元々、同義（類義）名詞からなる並列構造であったろう。また、これは憶測に過ぎないが、のちにそれが修飾構造（non-head+head）と再解釈された可能性があると考え。同義並列構造の場合、情報伝達は二音節語の前部要素だけでも足りるし、修飾構造でも non-head たる前部要素が担う情報量が大きい。そのため、音声的には第一音節にストレスが置かれるようになった。この状態は現代中国語のような軽声とは異なるが、第二音節が第一音節より弱く発音される傾向があったと推定する。このような音声的弱化と連動して、“晨”や“夕”が担った〈あさ〉、〈よる〉という原義も薄れた。つまり、後部要素の音声、意味両面での弱化が方位を表す“上”への変化を促した動機であった。衰弱した語が他の語や語群の影響を受けて変化しやすくなるというのはジリエロンの学説の重要なモチーフである。その結果、まず“早晨”が“山上”、“墙上”のような方位成分を有する語群の牽引を受けた（岩田 2007: 18）。冒頭で述べたように、この牽引は類推の特質も併せもつため、「類推牽引」と呼ぶのがふさわしいかと思う。しかし、なぜ“里”など他の接尾辞ではなく“上”であったのか？ 次節で述べるように、それはやはり方位、時間概念に関わる語義が関係していたと考えるべきである。

二音節語からの変化という仮説を持ち出さなくても、“早”と“晩”はそれぞれ先秦、六朝から単音節で〈あさ〉、〈よる〉を表す用例があるので（何 2017、汪 2018），“早上”、“晚上”は単音節形を基礎に形成されたと言えれば簡単ではある。実際に、東南沿岸方言には、“朝头”、“早头”、“夜头”、“晩头”など名詞接尾辞“头”を取る語形が多い。“夜头”、“晩头”は唐五代の資料に見られる。

(18) 廿三日晩頭，開元寺牒將來，送勾當王大使。（唐・圓仁《入唐求法巡禮行記》）

(19) 白日長相見，夜頭各自眠。（《敦煌曲子詞、南歌子》）

しかし、“単音節語幹+头”の語構成を取るこれらの形式は、おそらくその後の江淮地域で生まれた“早上”、“晚上”とは直接関係しない。(18)については、現在、“晩头”の分布は長江以南に限られ、江蘇南部、浙江、広東に散在している。第1章の(1)の例文について触れたが、円仁が旅行した当時、“晩头”は長江下流域の方言語形だったのである。それが一旦衰退したのち、“晩夕”のような“晩X”系の語形から“晚上”が生まれたと考える。

2-5 なぜ“一上”だったのか？：季節を表す語形が示唆するもの

上述のように、“晚上”の文献初出例は元代の資料である。ところが、“晩下”という語形が唐代の詩人によって使われている。

(20) 朝來門閣無事，晩下高齋有情。（韋應物《雜曲歌辭 三臺》之二）

この例は第一章(4)で挙げた詩の後半部。ここで“晩下”は“朝來”に呼応している。“朝來”の“來”は、〈さくばん〉や〈よる〉を表した“夜來”の“來”と同様、接尾辞化していると考えられる。“晩下”の“下”も接尾辞化していたのであろう。“朝來”、“晩下”の形成は、前節で挙げた“晩頭”と同じく、単音節形を基礎に接尾辞が付加された結果だったと考える。しかし、なぜ“下”だったのだろうか？

ここで、角度を変えて考察する。四季を表す語形は、全国的に“春天”、“冬天”のように“一”が多いが、方位成分を伴う語形も少なくない。下記5地点の例を挙げる。それぞれ〈あさ〉と〈よる〉の語形を付記した。

	〈はる〉	〈ふゆ〉	〈あさ〉	〈よる〉
江蘇・海門	春里、春场里	寒里、寒场里	早晨头	夜里、夜来
陝西・神木	春上、春起	冬里	早起	黒地
陝西・宝鶏	春上	冬上	早起、赶早	晩
山東・博山	春上	冬天、冬儿	清晨	后晌、黑夜
江西・芦溪	春上	冬下俚	夜俚	清早

このうち江蘇省の海門では〈あさ〉を除いて“里”が使われており、“夜里”への類推が進んでいるかに見えるが、他の4地点では〈よる〉が“晩上”ではないのに、〈はる〉に“春上”を使っている。うち陝西省の宝鶏では、〈はる〉と〈ふゆ〉のいずれにも“一上”が使われているが、神木では“春上”／“冬里”のペアであり、“晩上”／“夜里”と平行的な組み合わせであることが注目される。さらに、江西省の芦溪では、〈はる〉が“一上”、〈ふゆ〉が“一下”である。これらは、四季のうち早く来るのが〈はる〉で、遅く来るのが〈ふゆ〉という意識が働いた結果ではないだろうか。

四季を表す語形から類推すれば、宋代から元代にかけて起きた“早X”、“晩X” > “早上”、“晩上”の変化も、“上月”(先月)、“下月”(来月)などの“上”、“下”の意味が意識された可能性がある。つまり一日のうちで早く来るのが〈あさ〉で、遅く来るのが〈よる〉というわけである。“上月”、“下月”の用例は唐代から見られるので、これはありうることである。¹⁰⁾ こうしてみると、接尾辞化が起きた段階でも“上”、“下”の原義は一定程度残されていたのだろう。その上で、“早上”が“上”ならば、それに対応する〈よる〉の語形は本来“晩下”になるはずで、上記(20)の用例にみられる唐代の“晩下”はまさしくその例である。現代方言にも〈あさ〉に“上”、〈よる〉に“下”を使う例がある。

“早上头”／“夜下”(安徽・潜山、績溪)

四季を表す芦溪の語形“春上”／“冬下俚”はこれと平行的である。また、“晩上”／“早下”のように“上”と“下”が逆のペアが形成された方言もある(河北・昌黎)。ここでは時間軸に沿

って、〈よる〉が先、〈あさ〉が後という意識が働いたものと推定される。ペアの形成には至らずとも、淮河以北の北方地域では、〈よる〉を表す“黒下”の分布地点が少なくない（地図3参照）。

しかし、江淮地域では〈あさ〉だけでなく〈よる〉にも“上”を使うという結果になった。それは“晩X” > “晩上”の変化において、すでに存在した“早上”への類推作用が強かったためと考えねばならない。（20）の用例にみられる唐代の“晩下”はその後、衰退したのであろう。管見では現代方言に“晩下”は存在しない。のちの“晩X” > “晩上”の変化はそれとは直接関係なく、“早上”への類推によって生じたものである。

3. 結語

小論のタイトルを「漢語方言の語彙変化の特徴」としたのは、日本語やヨーロッパの言語と比べて、他の語（群）に対する類推や他の語（群）からの牽引が起きることが多いという見通しに基づく。類音牽引はどの言語でも生起しているが、小論で論じた現象や下記のような現象は、中国語に特徴的な変化ではないだろうか。

類推牽引による汎用量詞“个”を有する語形の形成：“今日个、明日个、夜来个”など

⇒ 指示代名詞“这（一）个”、“那（一）个”による牽引 cf. 岩田（2007）

類推による接中辞 [lə] の形成：“胳勒肢” [kə lə tʂʰ]（腋）、“胳拉拜儿” [kə lə pɛr]（膝）など。

⇒ “吃了饭”、“看了看”のような完了体動詞句への類推 cf. 岩田（2011）

類推による単語家族“拐”の形成¹¹⁾：“倒拐、孤拐、脚孤拐”

⇒ 〈くるぶし〉、〈ひじ〉、〈頬骨〉、〈外反母趾〉など〈突き出たもの〉という共通語義を同一要素によって表した。cf. 《解釈地図》地図38

類推による接頭辞の形成：晋語の“圪”

⇒ 単語家族の発展形態。当初、限られた数の単語で共有されていた成分が他語にも拡大し、語構成能力を獲得した。cf. 《解釈地図》地図41、岩田（2011）

もしこれら類推作用が中国語の語彙変化に特有のものであるとすれば、それは形態標識を欠く言語において、異なる語が特定の成分を共有することによって、語の有縁性を高めようとするためであろう。

注

* 小論は、2019年9月7日、東京大学本郷キャンパスで開催された日本中国語学会主催の「中国語学セミナー」における講演「漢語方言における語彙変化の特徴：時間詞二題」に基づく。本稿では、副題を改めた。また、〈よる〉を表す語に関わる本文第2章については、その後、

汪維輝教授及び何亮教授からそれぞれ御論著の提供及びご助言を受け、それによって論証を改めた個所がある。お二人のご厚意に深く感謝する。なお、本稿で引用した方言地図については、《汉语方言解释地图》(2009、白帝社)をネット上で公開することになった：<http://chinesedialectgeography.jp/>。原著が品切れになってから久しく、この間少なからずお問い合わせをいただいていたが、今後内外の多くの研究者の目に触れることを期待したい。

- 1) その後、木村英樹氏などから、牽引の主体である指示代名詞としては、“这一个”、“那一个”よりも、すでに唐代から用例が現れる“这个”、“那个”の方がふさわしい、とのご指摘を受けた。
- 2) これは正確には仮説である。先秦に外縁範疇を表す語形がなかったと断言するには、先秦及び漢、六朝の文献資料に拠る裏付けが必要である。
- 3) 陸游《老學庵筆記》卷10に“今人謂後三日爲外後日，意其俗語耳。偶讀《唐逸史裴老傳》，乃有此語。裴，大曆中人也，則此語亦久矣。”とあり、“外後日”は宋代にはかなり浸透していたことがわかる。大曆は766年～779年。
- 4) 地図2では“上前-”を表す記号が江蘇省にも2地点あるが、これは“上乔-”と表記される語形を“上前-”の変異形とみなしたためである。
- 5) 岩田(2007:23-24、注5)に筆者のかつての調査記録を挙げたので参照されたい。
- 6) 地図3から分布地点の絶対数は少なくないことがわかるが、それはたぶん《普通话基础方言基本词汇》(陈章太、李行建编，语文出版社，1996)に拠る所が多い。この資料は、〈晚上〉と〈夜里〉を別項目として立てており、前者に登録された語形には“晚上”が非常に多い。標準語形が登録されたと判断される。この資料を除けば、“晩-”系の頻度はずっと低くなる。
- 7) 岩田(2007:7-12)は、このような時間詞の体系を「B系統」と呼び、headに“日”を取った「A系統」と古代から併存していたと推定した。〈よる〉と〈きのう〉の概念、〈あさ〉と〈あした〉の概念が、それぞれ連想されやすいことを示し、唐宋期に生じた変化もその素地があったことがわかる。なお、“明朝”の“明”は〈次の〉ではなく〈明るい〉が本義。ならば“昨夜”の“昨”は〈過ぎた〉ではなく、〈暗い〉が本義だろう。
- 8) 脱稿直前に何亮教授からの私信により、“晩响”なら元代の用例があることを教えられた。“到晩响(响)，師傅前面撤簽背書”(汪維輝《朝鮮時代漢語教科書叢刊(一)》、《老乞大新釋》、中華書局、2005年、108頁)。
- 9) 現在、山東省、河北省、河南省などに分布する“后响”[xou ɕaŋ]は第二音節が轻声で発音されるため“后上”と認識されることもあり、さらに第二音節声母が第一音節声母の同化を受けて[xou xaŋ]のように発音されることがある(地図3のE-1類)。もし“晚上”の江淮起源説に拘らなければ、淮河以北の北方地域で生じた“夜”系語形の指示対象の〈よる〉から〈きのう〉への転移に伴い、〈よる〉の語義を補うべく生れたのが“晩响”であり、それ

が後に類義置換によって“后响”になったという推定も可能である。その場合、“后响”が“后上”と認識されるようになったのは、正しく「場所を表す接尾辞“上”への類推」によると言わねばならない。なぜなら“后响”、“后上”を使う地点では“早上”がほとんど使われず、直接の類推は想定し難いからである。

- 10) “以其上月已是此王之月，則下月從而可知，故每年之春唯一言「王」耳。”（《春秋左傳・隱公元年》王正月 孔穎達疏）
- 11) 中国歴史言語学において“単語家族”（word family）は古代に存在したとされる語源グループのことを指すことが多いが、本稿のそれは語源とは全く無関係に形成された単語グループである。

[参考文献] *配列は原語著者名のアルファベット順。

曹志耘主編（2008）《汉语方言地图集》，商务印书馆。

Grootaers, Willem, A. (グロータース) 著、岩田礼・橋爪正子訳（1994）《中国の方言地理学のために》，好文出版。

何亮（2017）〈汉语方言日内时间的表达格局及其形成〉，《汉语史学报》第17辑，69-84。

岩田礼（1995）〈汉语方言“祖父”“外祖父”称谓的地理分布——方言地理学在历史语言学研究上的作用〉，《中国语文》1995年第3期，203-210。

Iwata, Ray (岩田礼) (2000) “The Jianghuai Area as a Core of Linguistic Innovation and Diffusion: A Case of the Kinship Term “ye 爷””. *In Memory of Professor Li Fang-kuei: Essays of Linguistic Change and the Chinese Dialects*, University of Washington and Academia Sinica, 179-196.

岩田礼（2007）〈汉语方言「明天」、「昨天」等时间词的语言地理学研究〉，《中国語学》254，1-28。

岩田礼（2011）〈北方方言 -la- 中綴及 kaʔ- 前綴的来源——“腋”义词的方言地图〉，严翼相主编《中国方言中的语言学与文化意蕴》，韩国文化社，Seoul，8-38。

岩田礼（2017）〈語彙変化に関わる言語地理学的要因の再検討〉，《方言の研究》3，日本方言研究会，185-215。

岩田礼編（2009）《汉语方言解释地图》（*Interpretative Maps of Chinese Dialects*），白帝社。

岩田礼編（2012）《汉语方言解释地图 续集》（*Interpretative Maps of Chinese Dialects, Vol. 2*），好文出版。

国立国語研究所（1966-1974）《日本言語地図》。

李荣（1965）〈语音演变规律的例外〉，《中国语文》1965年第2期，116-126。[《音韵存稿》（1982年，商务印书馆）再收]

太田辰夫（1958）《中国語歴史文法》，江南書院。

汪维辉（1999）〈方位词“里”考源〉，《古汉语研究》第2期，34-38。

汪维辉（2018）《汉语核心词的历史与现状研究》，商务印书馆。

[引用方言書目]

*本文中に引用した地点の参照資料のみ挙げる。地図作成に使用した資料については、《汉语方言解释地图》（2009）に付した〈主要参照方言資料〉を参照。

[安徽省]

潜山：安徽省地方志编纂委员会《安徽省志 65 方言志》，方志出版社，1997。

績溪：赵日新《績溪方言词典》，江苏教育出版社，2003。

[福建省]

厦門：周长楫《厦門方言词典》，江苏教育出版社，1993。

福州：冯爱珍《福州方言词典》，江苏教育出版社，1998。

尤溪：陈章太、李如龙《闽语研究》，语文出版社，1991。

永安：永安市地方志编纂委员会《永安市志》，中华书局，1994。

福清：冯爱珍《福清方言研究》，社会科学文献出版社，1993。

[河北省]

昌黎：河北省昌黎县县志编纂委员会、中国科学院语言研究所《昌黎方言志》，科学出版社，1960。

[湖南省]

沅陵：杨蔚《沅陵乡话研究》，湖南教育出版社，1999。

[江蘇省]

海門：袁劲《海門方言志》，黄山书社，1997。

[江西省]

芦溪：刘纶新《芦溪方言研究》，中国社会科学出版社·文化艺术出版社，2008。

[山東省]

博山：钱曾怡《博山方言研究》，社会科学文献出版社，1993。

[山西省]

晋城：沈慧云《晋城方言志》，山西省方言志丛刊 4, 1983。

祁县：杨述祖、王艾录《祁县方言志》，山西省方言志丛刊 8, 1984。

[陝西省]

神木：邢向东《神木方言研究》，中华书局，2002。

宝鸡：张崇《陝西方言词汇集》，西安交通大学出版社·西安外语音像教材出版社，2007。

